

# 神楽坂花街における町並み景観の変容と計画的課題

## A STUDY ON THE TRANSFORMATION AND PLANNING TASKS OF HISTORIC TOWNSCAPE IN KAGURAZAKA-KAGAI

松井大輔\*, 窪田亜矢\*\*  
*Daisuke MATSUI and Aya KUBOTA*

The traditional townscape of Kagurazaka-KAGAI is appraised by citizens and tourists, whereas the structure of this townscape is not yet clarified. This paper clarified following three points.

1. Prewar Kagurazaka-KAGAI provided more mysterious townscape for visitors than present condition because there are more complex network of alleys and taller buildings.
2. The townscape, which has been rebuilt after the war, underwent big change. But some elements of prewar building design are inherited in KAGAI's buildings. Moreover, many ordinary buildings modeled after KAGAI's buildings in Kagurazaka-KAGAI.
3. We need more consideration how to control a design of buildings out of Kagurazaka-KAGAI.

**Keywords :** *Kagurazaka, KAGAI(play district), Historic buildings, Postwar buildings, Townscape, Authenticity*

神楽坂, 花街, 歴史的建造物, 戦後建築, 町並み景観, 真正性

### 1. 研究の背景と目的

かつて、旧東京市内には15区に28もの花街が点在した<sup>1)</sup>。戦後も、これらは戦禍からの復興を遂げ、昭和30年代には最盛期を迎えている。しかし、戦後の繁栄期は非常に短く、昭和40年代になると各地の花街が相次いで終焉を迎えた。現在、東京23区内に残る花街は新橋、赤坂などの東京六花街と大塚の7カ所のみである<sup>2)</sup>。新宿区神楽坂は東京六花街のひとつであり、東京都心に残る数少ない「生きた」花街として貴重な存在と言える。さらに近年、路地と黒塀、花街建築<sup>3)</sup>群を中心として構成される神楽坂花街の町並み景観は、文化や観光などの側面から高く評価され、多くの市民や観光客で賑わっている<sup>4)</sup>。一方で、神楽坂周辺は鉄道5線が乗り入れる交通の要所であり、建築行為が盛んな開発圧力の高い地域でもある。このように、神楽坂は花街の雰囲気をも今に伝える「歴史的市街地」でありながら、開発行為が繰り返される「商業地」でもあるという、異なるふたつの特徴を併せ持っている。その結果、この地域のまちづくりでは町並み景観の変化を許容しつつも、その景観の固有性を後世に継承していこうとする、動的な都市保全が意識されてきた<sup>5)</sup>。

ところが、この町並み景観について、学術的な視点からその構造を明らかにしようとした調査は行われていない。これは、第二次世界大戦中の空襲により神楽坂一帯は焼けてしまい、現存する市街地は戦後に再建されたものであるため、建築史分野では歴史的市街地

として認識されず、調査対象とされてこなかったことがひとつの要因と考えられる。

以上のように、神楽坂を歴史的市街地として認識するか否かという点で、訪問者やまちづくり関係者と研究関係者との間には認識の齟齬が存在する。その結果、神楽坂花街の町並み景観の特徴について十分な検討が行われないまま、確固とした根拠のない「江戸情緒」や「花街」といった曖昧なイメージばかりが先行し、外観の一部に瓦庇やガラス障子などを取り入れる和風の建造物が増加している。これらのイメージ先行型の和風建造物は、東京都内でも貴重な町並み景観である神楽坂花街に対して、歴史的な真正性の観点から悪影響を与える恐れがある。神楽坂の町並み景観を継承していくには、この真正性を意識しながらまちづくりを行うことが重要であろう。そのためには、まず町並み景観の構造と構成要素を明らかにし、それらを真正性の観点から景観計画などに展開していくことが早急に検討すべき課題であると考えられる。

そこで本研究は①神楽坂花街における戦前・戦後の景観変容と②現存する町並み景観の構造および構成要素を明らかにし、③これらの花街全域への影響を明らかにすることで、④当該地域における町並み景観保全の計画的課題を抽出することを目的とする。なお、本研究における「町並み景観」とは街路から望見できる物理的な景観要素（不動産）のうち、築50年が経過していると推測できるもの<sup>6)</sup>

本論文は、2010年および2011年の日本建築学会大会学術講演梗概集の発表論文、参考文献9)10)を加筆、修正したものである。

\* 東京大学大学院都市工学専攻 大学院生・修士(工学)

\*\* 東京大学大学院都市工学専攻 准教授・博士(工学)

Graduate Student, Dept. of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo, M. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo, Dr. Eng.

の集合体と定義する。具体的には町並みを構成する「建造物の外観」と「街路」、および両者の中間に存在する「扉」と「前庭」を指す。ただし、花街としての町並み景観の特徴を把握することを目的とするため、「建造物の外観」は主に「花街建築」を調査対象とした。

## 2. 研究の位置づけと方法

### 2-1. 研究の位置づけ

神楽坂の都市空間に関する研究は、路地に関する言及と商店建築のファサードに関する言及とに大別できる。前者については、神楽坂三・四・五丁目地区地区計画に基づいた建築更新による路地空間の変容を検討したもの<sup>11)</sup>や、月島と神楽坂を対象に路地空間の質を保つ条件を考察したもの<sup>12)</sup>がある。一方、後者については、神楽坂通り沿いの商業ビルの店構えと看板に対する認識について明らかにした研究<sup>13)</sup>がある。本稿は町並み景観としての花街を扱っており、これらの研究とは関心が異なる。また、東京の花街を扱った研究としては水井による研究<sup>3)</sup>がある。この中では神楽坂も分析対象のひとつに挙げられているが、複数地域の花街建築について建築史的なアプローチからの分析を試みた研究であり、神楽坂花街の町並み景観の構造を明らかにしようとするものではない。

町並み景観の変容について扱った研究としては、伝統的建造物群保存地区における景観や町並みの変容を追った研究<sup>14)</sup>や、民家の伝統的意匠の変容について分析した研究<sup>15)</sup>がある。また、戦後の町並み景観の変遷を分析している研究として、飛騨古川を対象に新町家による町並みとファサードの変遷を明らかにした研究<sup>16)</sup>がある。これは本稿の関心に近いものであり、参考にする部分も多いが、本稿は歴史的文脈が一度切れてしまった土地において、町並み景観の変容からその本質を探ることに関心を置いている点特徴である。

### 2-2. 研究の方法

研究は以下の手順で行う。まず、文献・地図資料から戦前・戦後の神楽坂花街の範囲を特定する(3章)。続いて、地図資料を用いて花街の周辺地区を含めた神楽坂界限における街路網の形成過程を明らかにし、路地景観の変化について考察する(4章)。さらに、築50年が経過していると推測できる建造物と花街建築を抽出し、その残存状況と外観意匠の特徴を把握する。また、ここでは戦前の花街建築の特徴も検討したい。(5章)。さらに、5章で把握した花街建築の外観の特徴と神楽坂花街における他の建造物の外観意匠との照合を行うことで、花街建築の外観的特徴の一般建造物への派生状況を検討する(6章)。最後に結論として、戦前・戦後の神楽坂花街の町並み景観の特徴を総合的に考察し、神楽坂花街における景観形成の計画的課題の抽出を行う(7章)。

## 3. 神楽坂花街の概要

### 3-1. 神楽坂花街の歴史と範囲

江戸期の神楽坂界限は、善国寺よりも坂下の地域が主に武家屋敷として利用され、早稲田側には寺町が形成されていた。寺院の門前には町屋が建ち並び、特に善国寺と行元寺の門前は天保以前からの岡場所として知られた。時代は下って明治になると、空き家と化していた武家屋敷跡に芸妓置屋や料亭が入り込むようになり、現在の神楽坂花街の原型が形成される<sup>19)20)</sup>。明治7年に発生した火事によって神楽坂花街は全焼してしまうが、すぐに同じ場所において復興

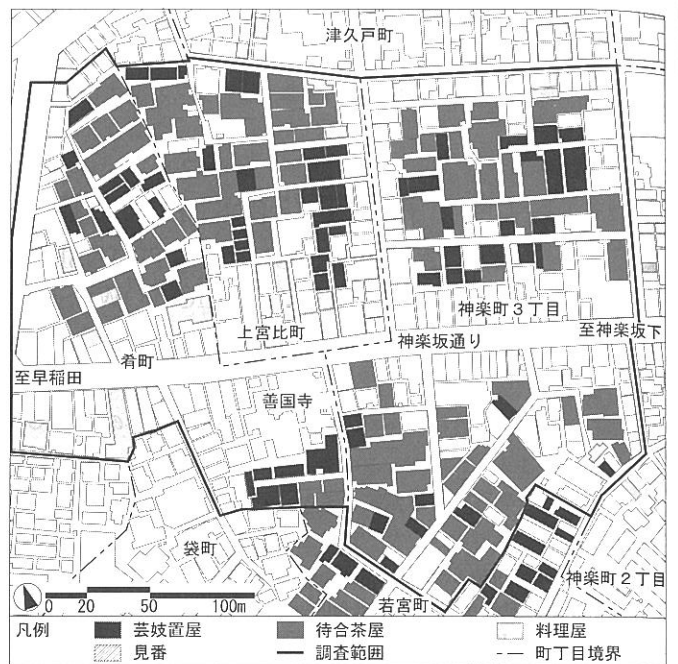


図1 昭和12年の神楽坂花街における花街建築の分布



図2 昭和27年の神楽坂花街における花街建築の分布

し、花街としての成長は続いた。特に大正12年の関東大震災以降は、震災による被害が軽微であったため東京中の花街より焼け出された芸妓衆が集まり、待合茶屋300軒という東京市最大の花街が形成されたという。このように一時は「山手銀座」と称されるほどに隆盛を誇った神楽坂花街であるが、昭和20年5月の空襲により灰燼に帰してしまう。戦後、いち早く花街は復興し、昭和30年代には戦後のピークを迎えた。しかしその後、オイルショック・バブル期の地価高騰・企業の実費削減などの影響を受けて衰退が始まり、現在は料亭4軒を残すのみとなっている。

以上のように、明治初期から150年近くの歴史を持つ神楽坂花街について、文献資料を用いて戦前と戦後の花街の範囲を確認した(図1、図2)。まず、戦前の神楽坂花街の範囲については、昭和4年に発行された「全国花街めぐり」<sup>11)</sup>に『神楽坂三丁目、上宮比町、肴町、

及び若松町の四箇町に跨って居るが、面積にすれば縦横ともに三町に足らぬ區域』であったと記述されている。また、昭和12年に作成された火災保険特殊地図<sup>9)</sup>(以下、火保図とする)から料理屋と待合茶屋、芸妓置屋<sup>10)</sup>を抽出してみると(図1)、全国花街めぐりの記述と同様の範囲に花街建築が集中していることを確認できる。上記の上宮比町と肴町は、昭和26年にそれぞれ神楽坂4丁目と5丁目に町名変更されている<sup>11)</sup>。また、全国花街めぐりにおける「若松町」の表記は若宮町の誤植であると考えられる。したがって、戦前の神楽坂花街の範囲を現町名で捉え直すと、神楽坂3・4・5丁目及び若宮町の一部であったとすることができる。

次に、戦後の神楽坂花街の範囲を確認するために、昭和27年に作成された火保図<sup>12)</sup>から料亭<sup>13)</sup>と芸妓置屋を抽出した(図2)。戦前の花街建築の分布と比べると芸妓置屋が集まる区域が異なるなどしているものの、戦後も神楽坂3・4・5丁目と若宮町の一部を中心に花街建築が集中していることがわかる。

以上より、神楽坂花街の範囲は戦前・戦後を通して神楽坂3・4・5丁目と若宮町の一部であり、戦災によって建造物が全て焼失したものの、範囲については変わることなく継承されていると言える。本研究では、その中でも町域全域に花街建築が分布している神楽坂3・4・5丁目を調査対象範囲とする。

### 3-2. 神楽坂花街の町並み景観に関わる制度

本研究の調査範囲のうち、神楽坂通りの北側街区の大部分が平成19年に策定された「神楽坂三・四・五丁目地区地区計画」の施行範囲となっている(図4)。また、同範囲は平成21年の新宿区景観まちづくり計画において「粋なまち神楽坂地区」にも指定された。これらの景観形成制度の策定は、平成12年頃に発生した超高層マンションによる景観紛争が契機となっている。そのため、高さ制限に重点を置いた基準設定となっており、一方で形態意匠に関する基準は曖昧である。つまり、「地区の景観及び周辺環境に配慮する」や「和の風情に配慮する」といった内容の基準が設けられているも

の、抽象的であるため設計者による解釈の幅の発生は避けられない。同様に、神楽坂通り沿道では「神楽坂通り地区地区計画」が、平成23年12月に都市計画決定された。この整備計画においても「地区の景観及び周辺環境に配慮する」という形態意匠に関する基準が示されているものの、やはり曖昧な基準と言える。このような景観形成基準が、先に述べたイメージ先行型の和風建造物の増加という問題の一要因となっていると考えられる。したがって、町並み景観の特徴を明らかにし、ここから計画的課題を抽出して景観誘導の仕組みに反映していくことが、早急に検討すべき課題であると考えられる。

## 4. 神楽坂の街路網の変遷

### 4-1. 戦前の神楽坂の街路形成

まず、江戸期から戦前までの神楽坂花街とその周辺地域の街路網の形成過程を見ていく(図3)<sup>14)</sup>。

先述のように江戸期の神楽坂では、現在の善国寺よりも坂下が武家地として使われていた。当時の街区は神楽坂や軽子坂、本多横丁、仲通りなどに囲まれた大きなものであり、絵図から路地の存在を確認することはできない<sup>15)</sup>。地図上で路地の存在を確認できるようになるのは明治になってからで、明治20年の地図<sup>16)</sup>に芸者新道やかぐら横丁を確認することができる。明治28年の地図<sup>17)</sup>には兵庫横丁やかくれんぼ横丁が出現し、明治維新後に武家地跡に入り込んだ神楽坂花街の発達と共に路地網が形成されていった過程が窺える。また、神楽坂の骨格となる大きな街路はこの頃にほぼ完成したと考えられる。さらに昭和12年の地図<sup>9)</sup>は、それまでの地図より詳細に街路が描かれているため、細かな路地の状況を見ることができる。ここからは神楽坂花街の範囲内で路地が毛細血管のように行き渡り、芸妓置屋や待合茶屋に繋がっていたことが分かる。このように奥へと伸びる路地網によって、表通りとは異なった花街独特の神秘的な雰囲気が作られていたと考えられる。

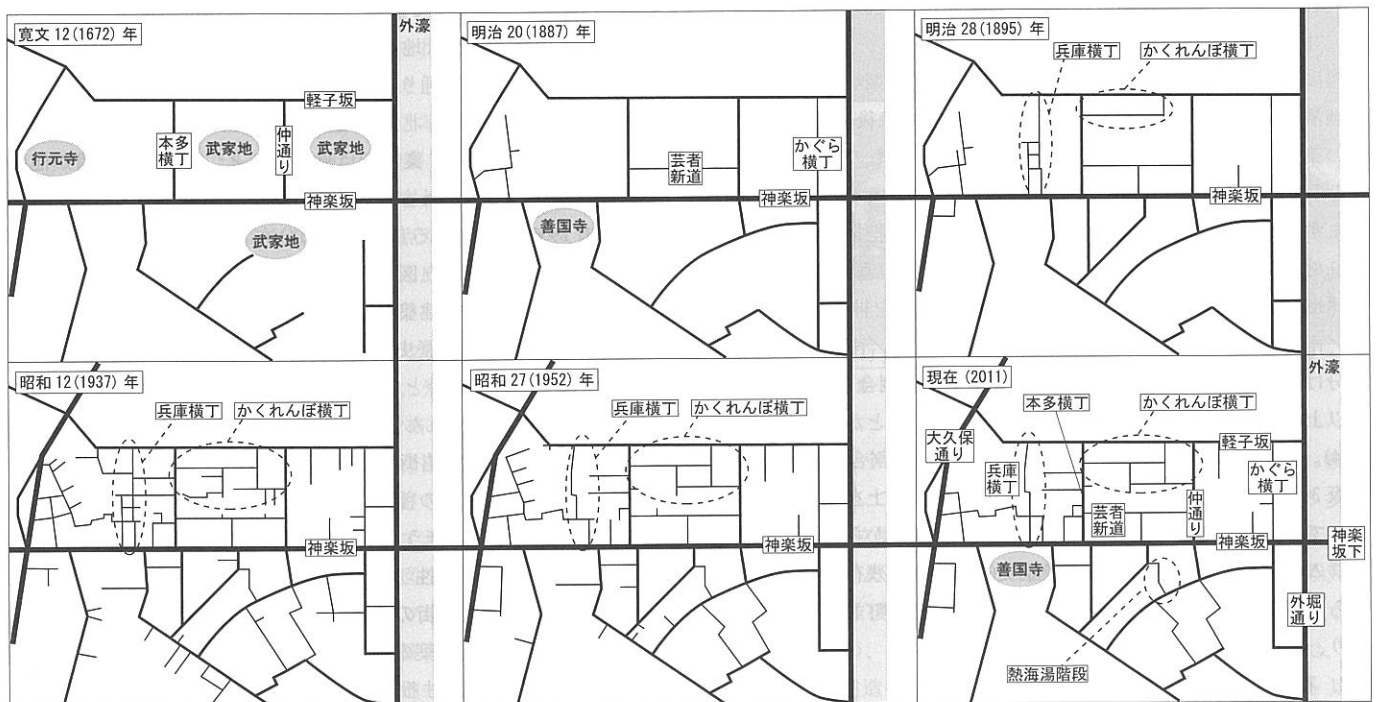


図3 江戸期から現在までの神楽坂境界の街路網の変遷<sup>14)</sup>

#### 4-2. 戦後の神楽坂花街の街路変化

続いて、戦禍を経て現在に至る街路網の変化を把握していく。

まず、昭和期のふたつの地図<sup>22)</sup>を用いて戦前・戦後の街路網の変化を見ると、兵庫横丁の形状の変化、かくれんぼ横丁の袋小路の解消を大きな変化と認識できる。特に後者は閉鎖性が解消されて回遊性が生じているため、劇的な景観の変質だったと考えられる。さらに毛細血管のように花街全域に分布していた細かな路地網も整理され、数を減らしたことも重要な変化であろう。これらの戦前・戦後の変化で、先に述べた花街の奥性が低減してしまったことを指摘できる。ただし、街路の骨格には大きな変化は見られない。これは都内の他地区とは異なり、神楽坂では戦災復興時の大規模な区画整理が行われなかったためと考えられる。さらに、戦後の街路網の変化を見てみると、花街の衰退とともに建物の大型化が起り、その結果として戦前から受け継がれてきた細かな路地が消失している。以前、行元寺が存在した場所に建てられた超高層マンションによって、路地網がまとめて消失したことが顕著な例である<sup>20)</sup>。

以上、江戸期から現在までの神楽坂境界の街路網の変化をまとめると、戦前までに形成された街路の骨格は現在に継承されているものの、路地に関しては第二次世界大戦を経て細かな袋小路が多く消失している。したがって、花街の雰囲気は戦前と戦後では大きく異なると推察できる。ただし、兵庫横丁やかくれんぼ横丁のような代表的な路地は大きく形状を変えながらも消失していないため、現在でも歴史の積層を実感することができる。これらの路地はいずれも2.7m未満の幅員であり、これを維持していくには建築基準法第42条第3項による指定を視野に入れる必要がある。しかし、たとえ三項道路に指定されたとしても、結果的に幅員2.7mまで路地を拡幅することは回避できない。したがって、路地内の建造物を維持したまま再利用することを、建造物の所有者に働きかけるようなまちづくりの仕掛けも検討すべきと言えよう。

### 5. 戦後に再建された神楽坂花街における花街建築の特性

#### 5-1. 歴史的建造物の残存状況

次に建造物について把握していく。ただし、神楽坂花街の建造物は戦禍により全て消失しているため、ここでは戦後に建てられて、かつ築50年以上が経過していると推測できる<sup>14)</sup>ものを歴史的建造物として把握していく。

まず、調査範囲内における歴史的建造物の数を把握する。目視により確認できた建造物総数は302棟であり、そのうち91棟を歴史的建造物として推定することができた。調査範囲を神楽坂3丁目(北側/南側)、神楽坂4丁目、神楽坂5丁目(北側/南側)の5地区に分けて地区の特性を見ると、神楽坂4丁目の割合が特に高く、4割以上の建造物を歴史的建造物として抽出することができた(表1・図4)。続いて街路別の状況を見てみると、最も割合が高いのは神楽坂3丁目のかくれんぼ横丁沿道であり、半数以上を歴史的建造物として推定することができた。この他に本多横丁から西に延びる路地群の沿道も、比較的高い割合で歴史的建造物が残存している。これらの路地沿道は小規模ながらも連続した歴史的町並みを形成しており、保存を検討すべき限界である。

#### 5-2. 花街建築の残存状況

次に、前節で抽出した歴史的建造物と花街との関係を見る。

表1 神楽坂花街における花街建築と歴史的建造物の棟数

	神楽坂3丁目		神楽坂4丁目		神楽坂5丁目		合計
	北側	南側			北側	南側	
建築物総数(S27)	90棟	79棟	73棟	76棟	36棟		354棟
芸妓置屋	34棟	18棟	19棟	24棟	6棟		101棟
料亭	12棟	10棟	14棟	6棟	1棟		43棟
見番	0棟	1棟	0棟	0棟	0棟		1棟
花街建築・合計	46棟	29棟	33棟	30棟	7棟		145棟
建築物総数(H23)	90棟	71棟	67棟	32棟	43棟		302棟
歴史的建造物	32棟	16棟	29棟	10棟	4棟		91棟
歴史的建造物の割合	36%	23%	43%	31%	9%		30%
花街建築の歴史的建造物	10棟	5棟	5棟	0棟	0棟		20棟



図4 神楽坂花街における歴史的建造物と花街建築の残存状況

まず、1952年の調査範囲における花街建築<sup>15)</sup>の分布状況を図2を用いて確認したところ、建造物総数354棟のうち145棟を花街建築として確認することができた。その内訳は芸妓置屋が101棟、料亭が43棟、見番が1棟である(表1)。この他に、割烹と旅館が9棟存在していた。これを地区別に見てみると、総数では神楽坂3丁目(北側/南側)が最も多く、神楽坂通りを挟んで南北両側に併せて75棟の花街建築が存在した。特に、北側は路地に面する建造物のほぼ全てが花街建築であった。また、業種別に見てみると、神楽坂4丁目(北側/南側)が他に比べて料亭の割合が高いという特徴がある。

以上の1952年における花街建築の分布と、現在の歴史的建造物の残存状況を照合すると図4のようになる。範囲内の91棟の歴史的建造物のうち、花街建築に該当すると推察できる建造物<sup>16)</sup>は20棟であった<sup>17)</sup>。これは歴史的建造物の2割強、1952年の数の1割強でしかなく、数・割合ともに花街建築の残存状況はよくない。このうちの約半数はかくれんぼ横丁沿道に集中して残っており、小規模ではあるが連続した花街建築の町並みが維持されている。また、残存している花街建築の種類を見ると料亭が6棟、芸妓置屋が13棟であり、芸妓置屋のほうが多く残存していることがわかる。

#### 5-3. 花街建築の外観特性

##### 5-3-1. 戦前の神楽坂花街の建築

次に、抽出した花街建築の外観特性について明らかにする。まず、戦前の神楽坂花街における花街建築の建築特性を検討することで、神楽坂の花街建築の原型を探りたい。ただし、第二次世界大戦によ

り神楽坂に関する多くの文献資料も焼失したため、本節においては限られた資料から戦前の神楽坂花街を検討することに努めた。

図5の左は明治期の神楽坂三丁目・芸者新道の絵図<sup>27)</sup>である。芸妓や旦那衆の姿が描き出された絵図であるが、建造物を見ると路地との間に小さな前庭が設けられ、松などの木々が植えられていることがわかる。また、細い柱材が用いられていて中には丸太材も用いられている(窓から顔を出す芸妓の右側)様子が描かれている。その隣は、時代を下って昭和10年頃の上宮比町(現神楽坂4丁目)・兵庫横丁の写真<sup>28)</sup>である。写真の左側手前にはなぐり加工が施された黒塀を確認でき、奥の建物には下見板や縦羽目板の外壁と欄干が施されている。さらに、右は昭和初期に描かれた若宮町の風景<sup>29)</sup>である。こちらからは三階建ての花街建築があったことや、黒塀以外にも様々なデザインの塀が作られていたことを推測できる。

一方で、図1・図2を見ると神楽坂通りに花街建築は存在していなかった。昭和5年と同12年に神楽坂を見上げる視点で撮影された写真(図6)から神楽坂通り沿いの建造物の特徴を見てみると、蔵造りの町家(図6左)<sup>30)</sup>や看板建築(図6右)<sup>31)</sup>が建ち並んでいたことがわかる。いずれも、図5に挙げた花街建築に見られた繊細な意匠は見られず、むしろ重厚な造りの建造物が建ち並んでいたと言える。また、建造物と街路との関係についても、前庭や塀で区切られている花街建築とは異なり、神楽坂通り沿いの建造物は街路と開放的に繋がっていた様子が見て取れる。したがって、同じ神楽坂花街の範囲内でも神楽坂通りと路地内では、町並み景観が著しく異なっていたと推察できる。

### 5-3-2. 戦後の花街建築の外観特性

水井は花街建築の外観的要素として20項目<sup>32)</sup>を挙げている<sup>3)</sup>。の中には、先に挙げた戦前の神楽坂花街の特徴も含まれる。そこで本項では、これらの項目を参考にしながら、現在の神楽坂花街の花街建築の特徴と戦前からの変化を追っていく。なお、元用途による外観的特徴の違いとして、芸妓置屋よりも料亭のほうが装飾的という傾向を確認できたが、顕著な違いとは言い難かった。したがって、以下の分析では花街建築全体として特徴を捉えていくこととする。

まず建造物の規模と形状について見ると、二階建てが殆どで三階建てはほぼない。水井が花街建築の特徴と挙げた入母屋屋根は少なく、切妻屋根が殆どである。屋根は瓦で葺かれている場合が多く、外壁はモルタルやリシンなどで耐火被覆されている。外壁に木材を用いている建造物は1棟しかなく、その点が戦前からの大きな変化と言える。一方、玄関や二階窓に付属する庇には木材を使用している建造物が多く、シンプルな外壁に意匠として木製庇が付加されているという形が、戦後の花街建築のひとつの典型になる(図7左)。

次に、意匠について細かく見てみると、先述した木製の玄関庇や霧除庇が目立つ。この他に木材は欄干や格子戸にも使われている。ただし欄干は、他の花街に見られるような擬宝珠付きの装飾性豊かなものを1棟にしか確認できなかった。さらに、以上に挙げた木製の意匠や一部の桁材には丸太材が使われており、これも戦前の花街建築から踏襲されたものと考えられる(図7右)。

最後に、配置形態から建造物と路地との関係について見ていく。現在の神楽坂花街における花街建築の配置と入口形状は、図8のように4種類に分類することができる。路地と直接的に面する配置形態は少なく、建造物と路地との間には緩衝帯が設けられている場合

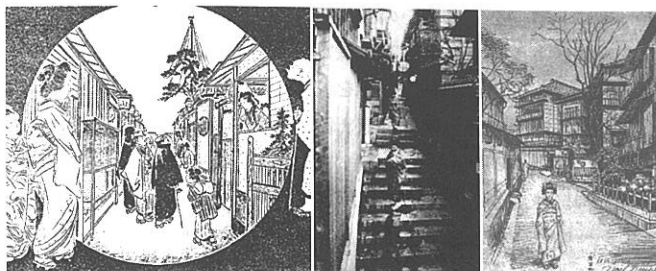


図5 戦前の芸者新道<sup>27)</sup>(左)、兵庫横丁<sup>28)</sup>(中)、若宮町<sup>29)</sup>(右)



図6 昭和5年<sup>30)</sup>(左)と昭和12年<sup>31)</sup>(右)の神楽坂通り

表2 花街建築の残存数と外観特性の傾向

用途・規模・形状		意匠的要素	
元用途	置屋13 / 料亭6 / 他1	木製庇	玄関庇5 / 霧除庇3
現用途	住宅9 / 飲食9 / 他2	丸太材	使用9
規模	総二階14 / 一部二階5 / 三階1	塀素材	ブロック6 / 黒板4
屋根形状	切妻16 / 入母屋3 / 寄棟1	前庭	あり10 門 あり7
入り面	平入11 / 妻入9	装飾照明	あり2 欄干 あり6
屋根材	瓦15 / トタン4 / 他1	格子戸	あり5 扁額 あり1
外壁材	リシン14 / モルタル5 / 板1		



図7 神楽坂花街の花街建築の典型(左)と木製の丸太材(右)

類型	非接道型	半接道型	接道型	接道引込型
平面形状				
凡例				
写真				
棟数	7棟	4棟	3棟	6棟

図8 配置形態から見た花街建築の分類

が多い。このような配置形態は図5の左右の絵図にも見られ、戦前から受け継がれているものと推察できる。例えば、最も数の多い「非接道型」は玄関と路地の間に小規模な前庭・門・塀による空間を設ける型式である。ただし、神楽坂は密集市街地であるため、どの敷地でも「非接道型」にできるほど土地に余裕があるわけではない。そのため、「半接道型」や「接道引込型」にすることで、狭小な敷地でも建造物と路地の間に緩衝帯を設けることができるように工夫されている。具体的に説明すると、「半接道型」は建造物を

少しセットバックして、その空隙の一部を塀で囲んでいるものである。前庭というよりは目隠しの役割が強いと考えられ、図5左の絵図でも左側の建造物にその存在を確認できる。一方、「接道引込型」は建造物の一部を削り貫き、そこに半屋外の緩衝帯を設ける形態である。灯笼などを設置して、前庭のように設えているところもある。このような緩衝帯は直接的に玄関と路地を繋げないことで、客同士が鉢合わせすることを避けるための気遣いであると考えられ、他にも雨天時に訪客が濡れることのないようにするための配慮とも言える<sup>24)</sup>。いずれにせよ、花街の「もてなしの心」が配置形態に具現化したものと評価できる。さらに、この緩衝帯に黒塀や格子戸、装飾照明などを効果的に配置することで、路地から花街建築への連続性を演出していると考えられる。つまり、路地に対して完全に閉じているのではなく、緩衝帯内部へと視線を誘導し、その様子を垣間見せることによって、訪客の関心を惹きつける工夫が施されている。このような路地と建造物を一体に捉えた設えは、花街という特殊な用途に立脚した花街建築の特徴であると言えるだろう。ただし、緩衝帯と路地の間に設けらる塀の素材には、ブロックが多く用いられていることも特筆すべき点である。戦前も様々な素材の塀があったようなので奇異なことではないが、雑誌などによく取り上げられる神楽坂花街らしい黒板塀を有する建造物は4棟と少ないのである。

このように建造物の外観は大きく変化したものの、細部意匠や配置形態を戦前の花街建築から継承することで、花街の雰囲気を持しようとした住民の意志を感じることができる。

## 6. 神楽坂花街における花街建築の外観的特徴の派生

### 6-1. 歴史的建造物に対する派生

以上、神楽坂花街の町並み景観を街路と花街建築の外観にわけて分析してきた。ともに様々な外的圧力の影響を受け、戦前までに形成された景観の特徴が大きく変化している。したがって市民や観光客が現在の神楽坂を町並み景観として認識する要因は、街路と花街建築だけにあるのではなく、修景による町並み景観の維持も大きく影響していると予想できる。そこで本節は前節で取り上げた神楽坂花街の花街建築の外観的な特徴、つまり①木製庇②欄干③格子④丸太材⑤緩衝帯⑥黒塀が、範囲内の花街建築以外の建造物へどのように広がり、町並み景観の修景に寄与しているのかを把握したい(表3)。

まず、これらの外観的な特徴は花街建築が以前から建ち並んでいた路地だけでなく、通り沿い<sup>25)</sup>にも派生していることがわかる。ただし、通りに面している歴史的建造物には花街建築の外観的要素が殆ど用いられていない。一方で、路地内にある歴史的建造物には種類に大きな偏りもなく外観的特徴が用いられている。つまり、かつては路地沿いに建造物を建てる際に花街建築の存在が意識され、それがデザインに反映されていたこと、さらに路地内と路地外では建造物の特徴が違うことが認識されていたことを推察できる。

### 6-2. 非歴史的建造物に対する派生

一方で、路地内の非歴史的建造物に対する派生では少し違う現象が見られる。これらの建築物においては欄干と丸太材が用いられることが少なく、視覚的效果としてわかりやすい付加庇、格子、緩衝帯、黒塀が好んで用いられるという偏りが見られた。さらに、黒塀については緩衝帯に付随する形で設けられている建造物が半数しかなく、残りの半数は黒塀風の壁を設けている。路地との関係を意識

表3 建造物種類別の花街建築の要素の使用状況<sup>注12)</sup>

	歴史的建造物 (路地沿い52棟)	歴史的建造物 (通り沿い19棟)	非歴史的建造物 (路地沿い119棟)	非歴史的建造物 (通り沿い93棟)
①木製庇	9棟	0棟	11棟	2棟
②欄干	5棟	0棟	1棟	0棟
③格子	17棟	1棟(2棟)	14棟(5棟)	5棟(6棟)
④丸太材	13棟	0棟	5棟	2棟
⑤緩衝帯	23棟	0棟	20棟	2棟
⑥黒塀	6棟(2棟)	0棟(1棟)	7棟(8棟)	0棟(6棟)

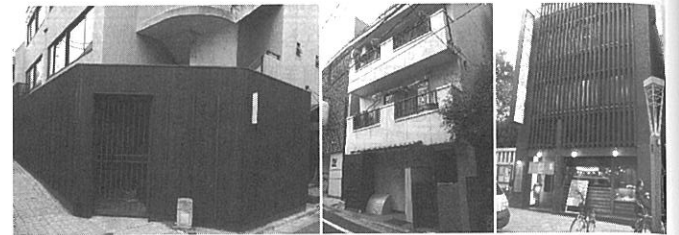


図9 一般建造物に対する花街建築の外観意匠の派生の例



図10 格子および黒塀の分布状況

せず、デザインに特化する形で花街建築の外観的特徴が用いられ、路地内の町並み景観との調和が図られている。このような傾向は通り沿いの非歴史的建造物でより顕著に見られ、格子状の意匠や黒塀風の外壁が多く用いられている。さらに格子状の意匠については、近年、図9の右側の写真のような形で格子を巨大に強調したデザインの建造物が多く建てられている。

### 6-3. 花街建築の外観的特徴の派生における課題

以上で一般建造物に対する花街建築の外観的な特徴の派生状況を示した。最後に比較的多くの建造物に用いられ、さらに形状にも変化が見られる格子と黒塀に着目して、花街建築の外観的特徴が一般建造物に派生することの意義と課題を整理したい。

図10は格子と黒塀の要素を持つ建造物を地図にプロットしたものである。これを見ても、やはりかくれんぼ横丁の沿道において両者の密度が高いことに気づかされる。かくれんぼ横丁では歴史的建造物と非歴史的建造物の区別なく、格子も黒塀も路地からの繋がりを意識して設置されている。僅かに黒塀風の外壁なども存在するものの、数多く残る歴史的な花街建築とそれ由来する正統派の修景

の双方の力によって、花街としての町並み景観が維持されていると評価できる。また、兵庫横丁では神楽坂通りから見て奥の位置に格子戸を採用している建造物が多くある。黒塀は花街建築を合わせて3棟にしか見られないが、独特の路地形状と緩衝帯が総合的に町並み景観の維持に寄与していると考えられる。

一方で、通り沿いでは街路との連携を考慮しない形で格子や黒塀が用いられていることが多い。特に神楽坂通りは格子や黒塀を模したデザインの使用が顕著である。神楽坂通りは路地内の花街としての景観とは異なる文脈の景観を構成していたことが戦前の写真からも明らかであり、今のところ神楽坂通り沿いの建造物総数と比較して格子や黒塀を強調したデザインの建造物は少ないため目立っていないが、今後の神楽坂通りの景観形成においては改めて考慮していくべきであろう。

## 7. まとめ

### 7-1. 戦前の神楽坂花街の景観

戦前の神楽坂花街は路地網が発達し、細かな路地が毛細血管状に花街一帯に行き渡っていた。何度も折れ曲がる細い路地が空間に奥行きを持たせ、神楽坂通りなど表通りとは異なる雰囲気を出していたと考えられる。さらに奥に佇む花街建築は塀に囲われ、丸太材や欄干など繊細な意匠が施されていた。中には三階建ての建造物もあり、路地の奥へ入り込む感覚は強調されていたと考えられる。

### 7-2. 神楽坂花街の町並み景観の実態

このように神楽坂花街の景観を形成していた路地と花街建築は戦後復興と開発によって多くが姿を消した。現在、戦後に再建された花街建築と推測できる歴史的建造物が20棟のみ、特にかくれんぼ横丁に集中して残存している。これらのほとんどが耐火被覆を施された外壁を持つため戦前の花街建築とは外観形状が大きく異なっているが、木製庇や丸太材のような細部意匠と大小様々な緩衝帯を持つ配置形態などが戦前から継承されている。緩衝帯には黒塀や格子戸などが効果的に配され、訪客の関心を花街建築の内部へと誘導させることで、路地から続く花街の空間の奥行きが作られている。さらに、このような花街建築の外観的な特徴は、歴史的か否かの違いを問わず花街建築以外の一般建造物にも継承されている。花街建築自体は少なくなったものの、一般建造物はその要素をデザインに取り入れていることが花街の雰囲気を保つことに繋がり、町並み景観として市民や観光客に評価される要因のひとつになっていると考えられる。一方で、戦前・戦後を通して花街建築が立地していなかった神楽坂通りには、花街建築の外観的特徴を模した建造物が増えている。しかも、総合的に花街建築の外観的特徴を継承するのではなく、幾つかの要素のみを強調したデザインが施されている。

### 7-3. 神楽坂花街における計画的課題

最後に、以上に挙げた神楽坂花街の町並み景観の特徴と変容を踏まえて、計画論としてどのような課題があるのかを整理したい。

町並み景観の保全では景観の真正性を考慮することが重要である。しかし、神楽坂花街のような町並み景観の変容が激しい市街地において、真正性を考慮することは難しい。特に、神楽坂花街の花街建築は戦前から外観形状が大きく変化しており、部分的に継承された細部意匠のみを基準として設定し、景観誘導を行ったとしても、本質的な景観保全とは言い難い。前項までの分析を踏まえると、

建築的な特徴よりも、路地と花街建築を一体として捉えた空間の使い方を継承することのほうが、神楽坂花街の町並み景観の保全においては重要だと考えられる。したがって、建造物の形態意匠について、周囲との調和を求めている現状の景観形成基準に加えて、建造物の「配置」や「路地との繋がり」についての基準を設定することが検討すべきひとつの課題であると考えられる。同時に、路地の状態を保全することも重要になることから、三項道路の指定や路地内の建造物の再利用を促すような仕組みを構築することも必要と考えられる。さらに、路地沿道と神楽坂通り沿道では町並み景観の特徴が大きく異なることから、この違いを考慮することも真正性という観点から重要である。本研究の分析を基に、目標とする景観像をそれぞれの地区で設定し、これをガイドラインなどで具体的に示しながら景観形成基準に反映していくことが必要と考える。

以上に挙げた景観計画、都市計画、あるいはまちづくりの仕組みを通して、近年、特に神楽坂通り沿道において増えつつある、イメージ先行型の和風建造物や特定の意匠を強調したデザインの建造物を、神楽坂の町並み景観の特徴を踏まえた形へと誘導していくことが望まれる。

### 7-4. 今後の研究課題

本稿では、神楽坂花街の町並み景観の変容を整理することで、現在まで継承される神楽坂花街の町並み景観の特徴を抽出し、これを保全するための計画的課題の検討を試みた。しかし、物理的な側面から町並み景観の全体像を把握することを重視したため、花街建築の建築年代や利用形態の変遷、内部意匠の実態、一般建築との詳細な比較などの詳細な分析は行わなかった。神楽坂花街の町並み景観や花街建築の特徴をより正確に捉えるためには、先に挙げた様々な角度から空間を読み解いていく必要があるだろう。また、花街建築の普遍的特徴や花街の景観形成のあり方を検討するためには、全国的な視点で同様の検討を実施していく必要があると考えられる。以上は今後の研究課題としたい。

## 謝辞

本研究は科研費 22656131 の助成を受けて実施したものである。

## 参考文献

- 1) 松川二郎：全国花街めぐり，誠文堂，1929
- 2) 上村敏彦：東京花街・粋な街，街と暮らし社，2008
- 3) 水井七奈子：遺構調査に基づいた花街建築に関する研究（その1）- 東京の35の実例による花街建築の外観分析 -，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2，pp.371-372，2006.9
- 4) 佐藤正宗・岡崎篤行：近世の町割を継承した近代花街の都市空間と建築特性 - 港町新潟の古町花街を対象として -，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1，pp.781-782,2009.7
- 5) 都市製図社：火災保険特殊地図 - 牛込區 (2)-，1937
- 6) 都市出版：東京人，no.226，pp.12-87，2006
- 7) 交通新聞社：散歩の達人，no.162，pp.6-79，2009
- 8) 山下馨：神楽坂 - 都心のどまん中の路地の文化と担い手の復権（西村幸夫編著「路地からのまちづくり」），学芸出版社，pp.67-78，2006
- 9) 松井大輔他：神楽坂における商業店舗の移り変わりに関する研究その2 - 「神楽坂らしさ」の分布と景観形成上の課題について -，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1，pp.751-752，2010.9
- 10) 松井大輔他：神楽坂花街における歴史的建造物の残存状況と花街建築の外観特性，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1，pp.307-308，2011.8

- 11) 中須啓介・野澤千絵：神楽坂地区における地区計画に基づく建て替えによる路地空間の変化分析，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1，pp.63-64，2008.7
- 12) 南泰裕他：東京都心における路地的空間の研究 その1-2，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1，pp.637-640，2009.7
- 13) 志水英樹・越田益生他：神楽坂に面した店構えと看板に関する研究 その1-3，日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1，pp.955-960，1999.7
- 14) 西山徳明・三村浩史：伝統的建造物群保存地区選定後の集落景観の変容と維持に関する研究 - 白川村荻町合掌集落を事例として -，日本建築学会計画系論文集，第474号，pp.151-160，1995.8
- 15) 金弘己・宗本順三：伝建地区の現状変更行為における住民の建築希望内容と町並変容の研究 - 近江八幡市を事例として -，日本建築学会計画系論文集，第518号，pp.229-236，1999.4
- 16) 碓田智子・住田昌二他：大都市近郊農村地域における住宅外観形式の変容に関する研究 - 大阪泉州地域のシコロ葺きを中心として -，日本建築学会計画系論文集，第512号，pp.175-182，1998.10
- 17) 佐野雄二・岡崎篤行・高見沢邦郎：伝統の様式を継承した新たな町並み景観の形成過程と計画的課題 - 岐阜県古川町の歴史的市街地を対象として -，日本建築学会計画系論文集，第531号，pp.179-185，2000.5
- 18) 村西真一・岡崎篤行・小柳健：伝統の様式を継承した現代の町家におけるファサードの発展過程 - 飛騨古川の「新町家」に着目して -，日本建築学会計画系論文集，第650号，pp.883-888，2010.4
- 19) 新宿歴史博物館：新宿区の民俗(5) 牛込地区篇，pp.23-35，2001
- 20) 西村和夫：雑学神楽坂，角川学芸出版，pp.111-118，2010
- 21) 新宿歴史博物館：新修新宿区町名誌 - 地名の由来と変遷 -，pp.33-35，2010
- 22) 都市製図社：火災保険特殊地図 - 新宿区(11) 神楽坂方面 -，1952
- 23) 新板江戸外絵図，1672(新宿区教育委員会：地図で見る新宿区の移り変わり - 牛込編 -，pp.12-13，1982)
- 24) 東京実測図，1887(新宿区教育委員会：地図で見る新宿区の移り変わり - 牛込編 -，pp.320-321，1982)
- 25) 東京市牛込区全図，1895(新宿区教育委員会：地図で見る新宿区の移り変わり - 牛込編 -，pp.326-327，1982)
- 26) 窪田亜矢：各主体の動向に基づくマンション紛争防止に向けた考察 - 神楽坂超高層マンション計画を事例として -，日本都市計画学会論文集，No.38-1，pp.52-57，2003.10
- 27) 東陽堂：新撰東京名所図会 - 牛込区の部・上 -，p.13，1904
- 28) 牛込警察署：牛込警察署の歩み - 創立100周年記念 -，pp.18-19，1976
- 29) Noël Nouet：Tokyo - fifty sketches -，p.50，1946
- 30) 東京市牛込區役所：牛込區史，pp.590-591，1930
- 31) 牛込三業会：牛込華街読本，p.172，1937

## 注

- 注1) 文献1)には、15区28花街として新橋・新富町・霊岸島・日本橋・芳町・講武所・池の端・根岸・柳町・浅草・吉原・烏森・神明町・芝浦・富士見町・飯田河岸・溜池(赤坂)・荒木町・大木戸・新宿・神楽坂・白山・湯島天神・駒込・麻布・深川・洲崎・向島が挙げられている。下線は東京六花街を指す。
- 注2) 各花街の戦前・戦後の変遷については、文献2)に詳しい。
- 注3) 本研究では、文献3)および4)を参考に、花街建築を芸妓置屋・待合茶屋・料理屋(料亭)の三業および見番の用途に使われた、あるいは現在も使われている建造物として定義する。「芸妓置屋」は芸妓を育て派遣する業種であり、「待合茶屋」と「料理屋」は芸妓が派遣される店である。「待合茶屋」は店内に調理場を持たず、料理は仕出しに頼る点が「料理屋」と異なる。戦前(図1)の神楽坂花街は、これらで構成される三業地だったが、昭和23年の風俗営業法公布により「待合茶屋」の営業が禁止され、「料理屋」と共に「料亭」という名称に統一された。よって、戦後(図2)は「芸妓置屋」と「料亭」の二業地となっている。「見番」は三業の間を取り持つ、花街の事務局の役割を担っている。戦前の神楽坂には新見と旧見というふたつの「見番」があったとされるが、文献5)からは場所を確認できなかった。
- 注4) 例えば、商業雑誌では文献6)や7)などに神楽坂特集が生まれ、歴史的市街地や伝統文化の中に新しさを併せ持つまちとして紹介されている。
- 注5) 目視により建造物の構造・木製建具(窓・窓枠など)・瓦の状態などを総

合的に判断して、歴史的建造物を推測した。

- 注6) ここでの分析は地図資料から変化を抽出したものであり、実際の路地の成立時期には誤差があるであろうことを留意しておきたい。
- 注7) 文献5)22)23)24)25)の地図を用いて作成した。
- 注8) 図2と図4を重ね合わせ、建造物の位置・大きさ・形状が同じと考えることのできるものを、現存する花街建築と推察した。
- 注9) 火保図は建造物の形状と用途を把握できる資料であるため、本稿ではこれを用いて花街建築の抽出を行った。ただし、火保図が発行された昭和27年は神楽坂花街の最盛期よりは少し前の時代であり、それ以降に開業した築50年以上の歴史を持つ花街建築がある可能性を留意しておく。
- 注10) ①庭・庭木あり②庭に松・竹・梅のいずれかあり③石畳または灯籠を配置④黒塀・木塀、または刳貫のあるモルタル塀⑤玄関や門構えが重厚⑥柱材が細い(3~4寸角)⑦格子が開口部に設置⑧玄関戸上部や外壁等に扇や松の型の刳貫、もしくは竹材等の細工あり⑨2階に縁がある場合、擬宝珠付く、または装飾的な浮彫あり⑩戸袋が装飾的⑪照明に装飾、または屋号入りの照明⑫装飾的な青銅製の樋⑬開口部に深い庇⑭⑮に加えて庇裏が装飾的⑯階高が高いまたは総2階⑰建具が装飾的⑱その他、装飾的な細工あり⑳屋根形状が入母屋もしくは綴葺⑲軒の反り⑳屋根のむくり。
- 注11) 建造物所有者に対するヒアリングによる。
- 注12) 表中の括弧は本来の用途を伴わず、イメージとして花街建築の外観意匠を強調して用いている建造物の数を示す。
- 注13) 6-1から6-3では花街建築が1棟も面していなかった神楽坂通り・大久保通り・本多横丁を「通り」と表現する(図2)。これ以外の街路を路地とする。

(2011年12月10日原稿受理，2012年6月29日採用決定)